「教育行政執行方針」「夕張市教育推進計画」等に書かれている専門的な用語等について

「Society5.0」

日本が目指すべき未来社会として、第5期科学技術基本計画において提唱された概念のことで、狩猟社会（Society1.0）、農耕社会（Society2.0）、工業社会（Society3.0）、情報社会（Society4.0）に続く社会であり、具体的には「サイバー空間（仮想空間）とフィジカル空間（現実空間）を高度に融合させたシステムにより、経済発展と社会課題の解決を両立する人間中心の社会」と定義されている。

「ウェル・ビーイング」

ウェル・ビーイングとは、世界保健機関（WHO）憲章の中で、「健康とは、病気でないとか、弱っていないということではなく、肉体的、精神的、そして社会的に、すべてが満たされた状態（Well-being）」と翻訳されている。

「個別最適な学び」

学習内容の理解や進度など一人一人の子供の実態や状況を考慮して個別に指導したり対応したりする指導を、これまで教える側からの視点として「個に応じた指導」と称してきた。この「個に応じた指導」を、学習者（子どもたち）の視点から整理した概念を「個別最適な学び」という。

「協働的な学び」

探究的な学習や体験活動などを通じ、子ども同士で、あるいは地域の方々をはじめ多様な他者と協働しながら、話し合ったり、調べあったり、発表し合ったりする学び。

あらゆる他者を価値のある存在として尊重し、様々な社会的な変化を乗り越え、持続可能な社会の創り手となることができるよう、必要な資質・能力を育成することにもつながる学び。

「ICT機器の活用」

ICTとは、「Information and Communication Technology」（情報通信技術）のことで、ネットワークを利用した情報や知識のやり取り、人と人とのつながりを重視し、それを活用する教育のこと。

夕張市では、文部科学省の「GIGAスクール構想」により、令和3年度、ゆうばり小・夕張中の児童生徒に1人1台のタブレット端末が導入され、校舎には高速通信ネットワークが整備された。小中学校では、これらを活用した授業改善に取り組み、個別最適な学びと協働的な学びの一体的な実現や、情報活用能力の育成を図るなど、より分かりやすい授業の構築をはじめ、学習の効率化、校務の効率化にも期待が持てる。

「TT」

ティーム・ティーチング（team teaching）のことで、複数の教員が協力して授業を行う方式。例えば、授業においてチーフとなる教師が授業をリードし、もう1名のサブとなる教師がチーフの指導を補

充するなどの役割を担う。

「NRT」

全国標準学力検査のことで、全国的な学力水準を知ることができる。

本市においては、年度当初に、小学校は2～6年生で国語と算数の2教科について、前年度に学習した内容の定着を確かめる検査を行っている。中学校は、全学年で、国語、社会、数学、理科、英語の5教科について、前年度に学習した内容の定着を確かめる検査を行っている。ただし、中学 3 年生については、行事等の関係で年度当初が忙しくなることから、前年度の 3 月に実施することにしている。児童生徒が、どれだけ学習内容を理解できたのか、身についたのかを全国平均と比較して把握することができる。

「ゆうばりっこ未来ファイル」

「個別の教育支援計画」と「個別の支援計画」を合わせたもので、特別の支援が必要な夕張の子どもたち等に長期的な視点から切れ目のない支援を行うために作成する個別のファイル。各学校間、または就労先などへ引き継いでいく。

「『架け橋期』の教育」について

文部科学省（中央教育審議会：幼児教育と小学校教育の架け橋特別委員会）は、5歳児から小学校1年生の2年間を「架け橋期」として焦点を当て、幼児期は遊びを通して小学校以降の学習の基礎となる芽生え培う時期であり、小学校においてはその芽生えをさらに伸ばしていくことが必要、と「架け橋期」の教育の充実を重要視している。

「心理的安全性」

組織や集団の中で自分の考えや気持ちを、誰に対しても安心して発言できる状態のこと。心理的安全性が高いと、質問や確認を恥ずかしがらずに行えたり、ミスをしても気兼ねなくそのミスを報告したりでき、組織や集団としてのまとまりが高まっていく、絆が深まっていくという効果がある。

「発達支持的生徒指導」

特定の課題を意識することなく、全ての児童生徒を対象に、学校教育の目標の実現に向けて、教育課程内外のすべての教育活動において進められる生徒指導の基盤となるもの。

発達支持的というのは、児童生徒に向き合う際の基本的な立ち位置を示し、あくまでも児童生徒が自発的・主体的に自らを発達させていくことが尊重され、その発達の過程を学校や教職員がいかに支えていくかという視点に立っている。すなわち、教職員は、児童生徒が「個性の発見とよさや可能性の伸長と社会的資質・能力の発達を支える」ように働きかける。

「援助希求的態度」

困ったとき、苦しいときに、進んで援助や支援を求めることができる、相談する力及びそのような姿勢・態度

「Q-U テスト」

学校生活における子どもたちの満足感や意欲、学級集団の状態などを質問紙(「やる気のあるクラスを作るためのアンケート」「いごこちのよいクラスにするためのアンケート」)によって測定するもので、担任は児童生徒や学級の状態を客観的・多面的に理解でき、いじめや不登校、学級の集団としての崩壊などの未然防止に役立てることができる。

「ピア・サポート」

ピア(peer)は仲間、対等、同輩、サポート(support)は援助という意味。

学校教育で、『ピア・サポートを取り入れた教育活動』というと、相手の立場に立ち、共感する力を身につけるために行う授業などのこと。

「新体力テスト」

小学生の種目は、握力、上体起こし、長座体前屈、反復横跳び、20mシャトルラン、50m走、立ち幅跳び、ソフトボール投げの8種目　※中学生の場合も8種目だが、20mシャトルラン又は持久走(男子 1,500m,女子 1,000m)を選択、ソフトボール投げはハンドボールを使用する。その他は小学生と同様。

「ゆうばりっこキャリア・パスポート『明日への架け橋』」

「キャリア・パスポート」とは、児童生徒が小学校から高等学校までのキャリア教育に関わる諸活動について、自らの学習状況やキャリア形成を見通したり振り返ったりしながら、自身の変容や成長を自己評価できるよう工夫された記録ファイルのことで、このファイルを夕張市では「ゆうばりっこキャリア・パスポート『明日への架け橋』」と命名している。児童生徒は、小学校から中学校、中学校から高等学校へと自分のキャリア・パスポートを引き継いでいく。

「学校運営協議会」

学校運営協議会制度は「コミュニティ・スクール」とも呼ばれ、学校と地域住民等が力を合わせて学校の運営に取り組むことが可能になる「地域と共にある学校」の構築に有効な仕組み。

学校運営協議会の主な役割は、校長が作成する学校運営の基本方針を承認する、学校運営に関する意見を教育委員会又は校長に述べることができる、教職員の任用に関して、教育委員会規則に定める事項に関して、教育委員会に意見を述べることができる、の三つがある。

「北海道における教員育成指標」

子どもの成長を担う教員等には、いかに時代が変化しようとも、その時代の背景や要請を踏まえつつ、次代を担う子どもたちを育てるという極めて重要な使命や責任をもつとともに、子どもたちの人格の形成を担う存在であることから、その職責の重さを絶えず自覚し、自分が子どもたちの道しるべとなるべく、常に資質能力の向上を図り続けることが大切である。ということを踏まえ、教員等一人一人が主体的に資質能力の向上を図る際の目標を共有するため、北海道教育委員会が平成29年12月に策定し、令和5年3月に改訂された研修資料。